

— お詫びと訂正 —

「超音波検査技術 Vol.43 Supplement 第43回日本超音波検査学会学術集会 プログラム・講演抄録集」におきまして図表の挿入箇所に誤りがございました。ここに訂正して、深くお詫び申し上げます。

S92

パネルディスカッション

「疾患毎の心エコー検査の進め方 僧帽弁逆流」

梅田ひろみ

(一般財団法人 平成紫川会 小倉記念病院 検査技師部 第一生理検査課)

上記抄録に挿入されるべき図表が

S218

一般演題

43・腹・31 「超音波検査が発見の契機となった虫垂子宮内膜症の1例」

町田 直子¹, 矢島麻里絵¹, 森 夕佳¹, 森 貞浩¹, 井上 知彦¹, 中川 潤一²

(相模原赤十字病院 生理検査課¹, 同 内科²)

の抄録に挿入されていました。

次頁にて訂正版の抄録を掲載いたします。

疾患毎の心エコー検査の進め方 僧帽弁逆流

梅田ひろみ

(一般財団法人 平成紫川会 小倉記念病院 検査技師部 第一生理検査課)

僧帽弁逆流が存在した場合、その機序と重症度を正しく評価することが重要である。機序にはprolapseや腱索断裂、穿孔といった器質的異常によるものとtetheringによる機能的異常によるものがある。これらの機序を弁尖の動きで分類したcarpentier分類が広く用いられており、弁尖の動きが正常なもの、過剰なもの、制限のあるもので分類している。逆流の原因は前尖のprolapseと後尖のtetheringといったように重複している症例も存在するので、弁尖一つ一つを十分に観察するように心がけることが重要である。僧帽弁逆流の定量法にはvolumetric法およびPISA法があり、逆流量、逆流率、逆流有効弁口面積でその重症度評価を行う。Volumetric法では中等度以上の大動脈弁逆流が存在すると僧帽弁逆流を過小評価してしまう。また、PISA法はPISAの径が収

	軽度 at risk	中等度 progressive	重度 severe
左房内逆流jet面積率	<20%	<20~40%	>40%
VC幅	<0.3cm	<0.7cm	≧0.7cm
逆流量		<60ml	≧60ml
逆流率		<50%	≧50%
逆流弁口面積		<0.4cm ²	≧0.4cm ²

表1 慢性僧帽弁逆流に対する重症度評価 2014 AHA/ACC ガイドライン

縮期を通して一定であることが前提であるため、使えない症例も存在するのでそれぞれの方法の限界を知っておく必要がある。AHA/ACCのガイドラインにおける重症度の基準を表1に示すが、実際の検査ではその重症度評価に迷う症例も少なくない。逆流のジェット幅やVCに加え、Mモードを用いた逆流の持続時間など多くの指標から総合的に評価することが重要であると考えられる。

43-腹-31 超音波検査が発見の契機となった虫垂子宮内膜症の1例

町田 直子¹、矢島麻里絵¹、森 夕佳¹、森 貞浩¹、井上 知彦¹、中川 潤一²
(相模原赤十字病院 生理検査課¹、同 内科²)

【はじめに】虫垂子宮内膜症は異所性子宮内膜症の一つであり、全ての子宮内膜症の約3%とされる比較的稀な疾患である。ほとんどは無症候性であるが、下腹部痛や慢性骨盤痛、急性虫垂炎症状や嘔吐・下血といった消化器症状の他、腸重積などの原因となることもある。今回、超音波検査でのみ指摘し得た虫垂子宮内膜症の症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。【症例】40歳代女性、臨床検査技師、初学者に対する腹部超音波検査トレーニングにて被検者になった際、虫垂に腫瘍性病変を指摘された。【症状】特になし。【既往歴】卵巣チョコレート嚢胞(右28歳、左36歳時に手術)、子宮筋腫【超音波所見】虫垂は背側に屈曲しており先端は約20mm大に腫大、不整形を呈し層構造は不明瞭化していた。血流signalは検出されなかった。【造影CT所見】虫垂に造影効果を伴う明らかな腫瘍性病変は認められなかった。【経過】CTでは明らか

な病変を認めず腫瘍マーカーも陰性であったが、超音波所見では悪性疾患を必ずしも否定できないことから、腹腔鏡下虫垂切除術が施行された。【病理所見】平滑筋線維内に内膜腺類似の腺管と間質が島状に散在してみられる。上皮に明らかな異型は認めない。Endometriosisを考える。【まとめ】虫垂子宮内膜症は卵巣チョコレート嚢胞の合併・手術既往例が多いといわれている。また、虫垂先端の腫大・硬結や屈曲といった肉眼的特徴を有することが多いとされており、今回の症例も類似した超音波画像が得られた。虫垂子宮内膜症を術前に画像検査のみで診断することは困難であると思われるが、婦人科疾患既往歴を詳細に聴取することで鑑別としてあげることが可能であると考えられる。本症例のように無症候性であることが多いとされているが、将来的に腸閉塞などの重篤な疾患に進行する可能性も考慮すると、超音波検査で指摘する意義は大きいと思われる。